「平成 26 年 11 月度研修会　第 27 回修習技術者研修セミナー」報告

修習技術者支援実行委員会　委員補佐
後藤 充弘　修習技術者(電気電子部門)

１．研修会概要

日　時　2014 年 11 月 8､9 日（土､日）
8 日 13:00～19:00・9 日 9:00～16:00
主　催　公益社団法人日本技術士会
　　修習技術者支援実行委員会
会　場　日本技術士会葺手第二ビル 5 階

２．研修会の内容

＜1 日目＞	
開会挨拶　副委員長	13:00～13:10　高橋　裕二
セミナーの主旨説明	13:10～13:30
司会　担当委員	和田　竜二
講演 1「ボスポラス海峡トンネルに挑む」	13:30～14:50
講師　土木学会フェロー	小山　文男　氏
休憩	14:50～15:00
講演 2「計画中の計算機を適用した情報システムの開発」	15:00～16:20
講師　技術士	川村　智　氏
アイスブレーキング	16:20～16:50
グループ討議	16:50～18:15
・プロジェクトの選定	
情報交流会	18:15～19:45
＜2 日目＞	
グループ討議	9:00～12:00
・課題の特定	
・課題解決に向けた討議	
休憩（昼食）	12:00～12:30
討議結果のまとめとしての論理展開	12:30～14:00
発表シート作成	14:00～15:00
発表・質疑応答	15:00～16:00
休憩	16:00～16:10
講評	16:10～16:30
副委員長	川村　智
修了証書授与・挨拶	16:30～16:40
副委員長	高橋　裕二

３．研修会の参加者

研修会の申込者は 19 名で、参加者は 17 名であった。1 次試験合格者が 11 名、JABEE 課程修了者/在籍者が 1 名で、その他は 5 名であり、その 5 名は横浜国大院生である。9 名と過半数が非会員と回答した。参加者年代では 20 代が最も多いものの、横浜国大院生によるものであり、彼らを除くと 30 代が多かった。部門は 8 部門に散らばっていて、建設と電気電子がそれぞれ 3 名でその他は 1 名ずつである。居住地は横浜国大のある神奈川が 7 名と多く、首都圏以外では静岡、愛知、滋賀から各 1 名の参加があった。参加回数では「はじめて」が 10 名であり、リピータが少なめである。講座を知ったきっかけも散らばっている。受講動機は「修習の一環として」が抜けだして多い。なお、女性は 3 名でいずれも横浜国大院生である。

＊＊＊＊＊＊＊　1 日目　＊＊＊＊＊＊＊

４．開会挨拶

高橋副委員長が開会挨拶を行った。本セミナーのテーマは業務遂行能力であること、技術士の定義を確認した。修習期間は、能力のギャップの確認、ロードマップの作成、PDCA サイクルによるスパイラルアップが重要である。このセミナーでは各自お土産を持ち帰ってほしい旨を述べた。

写真 1：高橋副委員長

５．セミナーの主旨説明

本セミナーの担当である和田委員がセミナーの中身について説明した。セミナーの目的の確認、グループ討議、進行の流れ、討議

及び発表をするプロジェクト選定について説明した。

写真 2：和田委員

６．講演１

小山講師は大手建設会社の技術者として、トルコのボスポラス海峡横断トンネルプロジェクトに海底トンネル部責任者として携わった経験を講演した。このプロジェクトはとても困難が予想され、トルコ 150 年の夢と言われていた。先方の条件では、両岸各駅の火災対策の事情から沈埋トンネル工法が指定されていたが、小山氏はこの工法なら日本では自分しかいないと思ったという。

沈埋トンネル工法においての最深工事であり、世界初で RC 沈埋函を浮上構築するなど新境地となったが、そのほかでも、潮流予報システム、海底ロボットにおいて新技術を開発した。

また、リスクマネージメントに関しても一般論を基調にしてこのプロジェクトの特徴的な事柄について述べた。プロジェクトを進める上でリスク管理がいかに重要であるかが伺われた。

不可能と言われたプロジェクトを成功させた体験ならではの内容が詰まっていた。

写真 3：小山講師

７．講演２

川村講師は、その時点では実機の存在しない計算機を前提とした情報システムの開発に携わった経験を講演した。当時の世界的な社会事情からはじまり、日本や勤務先企業の置かれていた状況を説明した。そういう状況の中で、グローバル企業のロンドンサテライトセンターに世界最速で信頼性の高い金融情報システムを構築することとなった。このような大規模なプロジェクトは日本のコンピュータ会社としては初めてであった。

実機の無い状況で開発するシステムでは様々なリスクを想定し、対策をする必要があった。そして川村氏は主務担当技術者として現地に赴くことになった。技術的な困難さもさることながら、実は現地での日常生活に関するリスク管理も非常に大きなものであったとのことである。

なお、今回の話はグループ企業内でも知られていないような内容を含んだために、配布資料は概要のみに留めたとのことである。

写真 4：川村講師

８．アイスブレーキング

くつろいだ雰囲気で班ごとに自己紹介やグループ内での役割分担、進行方針等を決める時間帯とした。

９．グループ討議（プロジェクトの選定）

班ごとに、どのプロジェクトを選定して討議及び発表の対象とするかを検討して決める時間帯とした。

１０．情報交流会

セミナー参加者、講師、修習委員会スタッフ等が参加して、会場後方にて情報交流会を催した。多くのセミナー参加者は当初、硬い雰囲気だったが、全員が簡単な自己紹介をした後には場はとても和らいだ感があった。

写真 5：交流会風景

＊＊＊＊＊＊＊　２日目　＊＊＊＊＊＊＊

１１．グループ討議

はじめに、1 名が遅刻していたこともあり、川村氏が 1 日目の講演の補足及びグループ討議の進め方のアドバイスを行った。遅刻者は 20 分程度遅れたが、全体としては支障なく、2 日目のグループ討議に入った。

写真 6：2 日目の討議風景

１２．休憩（昼食）

各班各自での昼食とし、近隣で弁当等を調達して来た人が多かった。

１３．発表準備

スケジュールでは「討議結果のまとめとしての論理展開」と「発表シート作成」とでそれぞれ時間を設定した。しかし、実際には発表シートを作成しながら論理展開している様子もあった。また、１班は発表準備に余裕を持って終わっていたが、４班はぎりぎりであった。

写真 7：発表準備中の風景

１４．発表

司会の和田氏の提示により、必ず全員が質問することとした。

１班：　テーマ「魅力ある道路空間の創造」～シェアードスペースの計画・実施における課題と解決～

唯一ノートパソコンを用いて発表を行い、発表者 1 名、パソコン操作者 1 名で臨んだ。ヨーロッパの例などを示し、道路利用に関して発表した。発表者もうまく、全体構成もしっかりしたものであった。

写真 8：1 班の発表

２班：テーマ「中国市場をターゲットとしたレトルトカレーの商品企画及び販売戦略」

大判紙２枚で、その一部に小紙に記入したものを貼るといった工夫があった。発表は 4 名全員交代で行い、時間丁度に発表し終えた。質疑応答では、この班の中国人学生と他の班のもう一人の中国人学生が中国でのカレーの事情を話し、その内容から広い国であることが伺えた。

写真 9：2 班の発表

３班： テーマ「日本海側に、東京から行ける新しい駅が出来る。開駅に合わせて、特産物のイベントを開催する。」

大判紙２枚に丁寧な字で書かれており、比較的見やすいものとなっていた。発表者は 1 名のみであった。質疑応答では食の安全性や大雪の場合の対応などリスク管理に関する事柄が挙がった。

写真 10：3 班の発表

４班：テーマ「新システムの開発　浮体式洋上風力発電」

大判紙１枚に内容を詰め込んだために細かい字となってしまった。発表は３名で担当し、時間丁度で終えた。

質疑応答で、メンバーの一人が発電のプロジェクトに係った経験があったことにより選んだとのことがわかった。

写真 11：4 班の発表

１５．講評

川村副委員長が講評を行った。全体として、短い時間の中で、参加者の成長を感じたとのことである。テクニックよりも中身が大切であるとしつつも、押さえてほしい発表の基本と“守・破・離”について簡単に述べた。これらを踏まえて各班の特徴を評した。

１６．修了証書授与・挨拶

セミナー参加者一人一人に高橋副委員長が修了証書を手渡した。このセミナーで得たことを明日からの業務に結び付けてほしいこと、高い志を持ってほしいこと、やがては技術士として業務に取り組んでほしい旨を述べて締めくくった。

写真 12：修了証書授与

以上